ラテンアメリカ
随想

# ニカラグアン・ドリームを求めて

今井 泰志

## ニカラグアってどんな国？

いきなりニカラグアン・ドリームと言ってもそもそもニカラグアを知らないと話がつながらないと考えるので、まずはニカラグアについて多少説明したい。普通ニカラグアと言われても、一般的にはどこにあるのか、どんな国なのか解らないと思う。あるとき青年海外協力隊員の1人が着任時の挨拶で筆者に、ニカラグアと聞いてアフリカにある国かと思った旨述べたことがあった。ニカラグアは北米大陸と南米大陸を結ぶ中米5カ国の中心に位置する小さな国である。北側にはグアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラスの3カ国があり、南側にはコスタリカ、パナマ、コロンビアと続いており、まさに北米大陸と南米大陸をつなぐ臍とも言えるところに存在している。

中米ニカラグア位置図 （在ニカラグア大使館作成）

人口は608万人、首都はマナグア市で人口は104万人である。面積は約13万平方キロで日本の約3分の1である。マナグア市は1972年の大地震で壊滅状態となり、その後復興は遅々と進まず、街は横へ横へと広がっていき、街の中心街もはっきりとしたものは無く展開しており、最近国際協力機構（JICA）が首都圏開発のマスタープランを提供したところである。

横へ横へと広がる首都マナグア（提供：ニカラグア港湾庁 EPN）

気候はというとはっきり言って毎日が日本の夏といった方がわかりやすいと言える。一年365日30度以上であり、季節と言えば乾期と雨期しかない、最も現地の人々は比較的気温が下がる雨期を冬と呼び乾期を夏と称している。乾期に当たる4月、5月は毎日35度を楽に超える暑さである。夏ばてや脱水症状にならないように気をつける必要がある。

ニカラグアの主要産品は、コーヒー、カカオ、金、牛肉、葉巻、ごま、豆等農牧業によるものがほとんどである。日本との貿易は日本への輸出額が28億円で、日本からの輸入が115.21億円である。主な輸出品は、コーヒー、ごま、エビ等であり、輸入品は、自動車をはじめとする輸送用機器、鉄鋼、電子機器等である。

## ニカラグアの政治は？

ニカラグアの政治と言えば多難の歴史を乗り越えてきており、この15年位でやっと落ち着いてきていると言えよう。1936年にソモサ大統領が選出されてからは43年間にわたり、親子3代で独裁政治を続けた。その後1979年にサンディニスタ革命政権が誕生したが、急激な左傾化により内戦状態となり、その中で1985年から90年までオルテガ大統領が政権を掌握した。この間、1987年の中米平和合意により、1988年に暫定停戦合意が成立し、1990年に至りようやく国連等による国際監視の下、大統領選挙が実施され、チャモロ大統領が勝利した。その後アレマン政権、ボラーニョス政権と民主政権が続いたが、2007年に至り、再びオルテガ政権が誕生したのである。オルテガ大統領は憲法の連続再選禁止規定をよそに2011年の選挙に出馬し、圧倒的な強さで再選を果たし、さらに2016年の選挙には憲法改正を成立させ、連続再選への道を開くと楽々三選は果たし、2017年1月に就任式を行った。この、オルテガ大統領の三選は与党サンディニスタ解放戦線（FSLN）の体制固めを着々と実施したのと併せ、経済運営もしっかりとこなし、この5年間は年間4.5%から5%と言う着実な経済成長を達成して、国民の後押しを得た結果でもある。ちなみに2007年にオルテガ政権が誕生したときには1人あたりGDPは1,021米ドルであったものが、2016年には2,091ドルと堅調な経済成長を見せている。そうは言っても、未だにニカラグアは中南米諸国においてはハイチに次ぐ貧困国である。今後5年間にわたりオルテガ政権が続く訳である

が、今次選挙においては、妻であり、Juventud Sandinistaという若者たちの支援団体を取り込んでいるロサリオ・ムリジョを副大統領に据えるという合わせ技も使い、盤石の体勢でニカラグアの政治・経済を運営していくことで長期政権を目指していくものと思われる。

### 日本の経済協力の効果は？

日本のニカラグアに対する経済協力は、内戦終結、民政化後の1990年に本格化した。特に一般無償資金協力としては、社会経済インフラ整備、開発・人材育成、環境・防災の各分野での協力を実施してきた。特に橋梁については、ニカラグアは1998年のハリケーン・ミッチによって被害を受けた際、全国の橋が流されてしまった中で唯一日本の協力による橋が残ったとして、絶大なる信頼感を寄せており、無償資金協力にてこれまで合計24の橋梁を供与してきた。一番大きな橋はコスタリカとの国境付近に建設された、長さ362メートルのサンタフェ橋である。ちなみにこの橋は23番目のものである。また、この橋の建設により日本はアクセス道路等を建設する訳で近隣住民から多大なる感謝の気持ちが表されている。

サンタフェ橋（提供：（株）安藤ハザマ）

筆者が非常に親しくしているマルティネス運輸インフラ大臣は常々日本の協力が他の国際機関の融資の呼び水となり、このアクセス道路や延長線上の道路の舗装につながってきた。さらに日本の協力は他の国と異なり、その橋の建設技術も惜しげ無く移転してくれた。おかげでニカラグアは自前でも日本と同様の橋が建設できるほどとなった、本当に日本には心より感謝すると述べている。同大臣は日本に対する親近感や感謝の気持ちを持ちつつ職務を続けてくれていたが、去る4月に健康上の理由から10年間務めてきた同職を離れてしまったことは残念である。

このほか、日本は技術協力、文化無償協力、草の根・人間の安全保障無償資金協力、見返り資金協力等の協力を行っており、現在は無償資金協力による病院建設事業や学校建設、また有償資金協力による橋の建設が予定されている。これまでの経済協力の総額は2014年までで、有償資金協力が123.44百万ドル、無償が780.4百万ドル、技術協力が215.85百万ドル等合計996.25百万ドルとなっている。

筆者はこれまで国内のほとんどの市に経済協力関連のオープニング・セレモニーのため出張してきているが、一番心に強く残っているセレモニーは、草の根無償による水道施設の引き渡し式である。その場で市長より、我々は昨日まで、カエルが住んでいる沼の水をカエルと一緒に飲んでいたが、今日から安全で透明で清潔な水道水が飲めるようになった。本当に心から日本に感謝すると述べた挨拶であった。

今後も日本はニカラグアの国民の貧困削減、都市と地方の格差削減等々の面で協力していく必要があると考える。

### ニカラグアの将来は？

初めて水道水を飲む少女（在ニカラグア大使館撮影。左は筆者）

これまで述べてきたとおり、ニカラグアはまだまだラテンアメリカ（中南米）の貧困国としてその発展は緒についたばかりである。首都であるマナグアにおいても道路は舗装され、片やベンツ、BMW、トヨタ、ニッサン、ミツビシ、マツダ等の新車が至る所に走っている傍ら、一方では牛車や馬車がのんびりと同じ道路を荷物を積んで歩んでいるのどかな風景が展開している。地方に行けば、道路を牛の群れが歩いており、見張りの牧童が馬に乗って牛を追いかけているのである。しかし、電気製品はと言うと4Kの大型テレビが販売されており、地方の中学生、高校生が普通にスマホやらタブレットやらを楽々に使いこなしている。このように経済成長途次の国であるニカラグアは過去と現在及び未来が渾然一体となって存在しており、これからも成長が一段と加速していくことは間違いない。

筆者も大学や民間企業において日本との経済関係に関する講演をしているが、その中で双方向での経済強化が必要である旨強調して

筆者のアメリカーナ大学における講演会（提供：UAM-UNIVERSIDAD AMERICANA）

おり、両国間の関係強化が少しでも進んでいくよう尽力している。

**ニカラグアン・ドリームとは？**

前置きが長くなってしまったが、筆者がなぜ今ニカラグアン・ドリームと言わせてもらうのか。これまで世界中から夢の国、可能性の国として、ラテンアメリカ諸国を含む世界中の企業が米国に進出してきたアメリカン・ドリームは終焉を迎えつつあり、本当の可能性は実はニカラグアにあるのだと言うことを言わんがために敢えてニカラグアン・ドリームを提唱したいと思った次第である。すでに発展の頂点に達してしまっている米国に比べれば、ニカラグアは未だ手つかずの分野が有り余るほどあり、起業にしろ、投資にしろ、あらゆる分野において外国からの投資･進出が可能なのである。政治的にも経済的にも安定した成長を続けているが、なかでも一番大きな投資の魅力はと言えば、中米諸国の中ではナンバーワンである治安の良さである。ということで、投資の可能性のある分野を一例としてあげれば、観光分野は未だ手つかずの自然が残されている数少ない国であり、伸び代は大きい。近年太平洋側においては、プライベート･ビーチとゴルフ場を備えたリゾート型ホテルの進出がめざましい。国としても観光振興に力を入れ始めているし、カリブ海側も今後インフラが整ってくれば観光分野の進出の可能性が増大してくるであろう。

ニカラグアに進出してきている日系企業はこれまでたったの4社であった。この4社とは、よく知られているYKK、医療機材を扱うNIPRO、やはり医療機材を扱い、最近はHONDA JET機の代理店も兼ね、小型ジェット機の販売に手を広げている、ベネズエラに本社を構えるSYI（SEIJIRO・YAZAWA・IWAI）社、そして日本のワイヤーハーネスをメキシコ、米国に向け輸出しているニカラグア人労働者約14、000人を擁する矢崎総業である。

ところが、筆者が着任してからわずか2年で新たに2社が立て続けにニカラグアに現地法人を開設したのである。その一つは、やはり医療機材を扱う太知ホールディング社並びに重機からITまでなんでもリースするとしているCSIリーシング社である。繰り返しになるが中米諸国の中では一番治安が安定しており、政治的・経済的にも安定しているニカラグアは今後とも着実に成長して行くであろうし、この点から鑑みても「ニカラグアへの投資は何時するの？」「今でしょう！」といえるくらい投資に向いている国であると考えられる。ついては日本の企業の皆様に是非ともニカラグアン・ドリームを実現して頂き度、よろしくお願いすることで筆を置くこととしたい。

（いまい やすし　在ニカラグア日本国大使）

## ラテンアメリカ参考図書案内

### 『中米の子どもたちに算数・数学の学力向上を ー教科書開発を通じた国際協力30年の軌跡』

**西方 憲広　佐伯印刷出版事業部**
**2017年3月　202頁　1,500円＋税　ISBN978-4-905428-69-5**

小学校の教員であった著者は、海外協力隊員として1987年にホンジュラスに赴き、活動したことをきっかけに、算数・数学教育を通じて教育レベルを上げ就業機会を増加させることにより、貧困や犯罪から抜け出す国造りに役立ちたいと、再度長期専門家としてホンジュラスに赴き、算数科指導力向上プロジェクトで実績をあげ、他の中米諸国でも実施された。その後も国際協力機構(JICA)の国際協力専門員として中南米のみならずアフリカ、アジア、中近東での教育案件の協力事業に関わり、現在は再びエルサルバドルにおいて小中等教育算数・数学指導力向上プロジェクトのチーフアドバイザーとして活動している。

とまどいつつも算数教育の現場に立った時から、日本が初めて開発途上国の算数教科書開発への技術協力に踏み込み、中米で広域“算数大好き”プロジェクトの発足と展開に奔走し、さらにこれを高校の数学教科書開発などに拡大しながら、人材育成、教育立国をめざす過程を長い経験と実績から具体的に語っており、生きた国際協力の姿を知ることができる。

JICAが協力したプロジェクトの歴史を再構築し、著者のメッセージを伝えるJICA研究所の「プロジェクト･ヒストリー」シリーズの一冊。

〔桜井 敏浩〕